

# Rio

リオ  
豊田市矢作川研究所 月報

## CONTENTS

- 矢作川流域に見られるタマムシ
- 新たな挑戦に向けて
- 今月の一匹
- 連載 矢作川のいきもの 3
- 研究所の調査風景
- 豊田市矢作川研究所セミナー

2002 August  
No.52

豊田市矢作川研究所

〒471-0025

愛知県豊田市西町2-19 豊田市職員会館1F TEL 0565-34-6860 FAX 0565-34-6028

homepage <http://www.hm.aitai.ne.jp/> yahagi/index.html e-mail yahagi@hm.aitai.ne.jp

\*Rioはホームページ上でもご覧になれます

## 矢作川流域に見られる

# タ マ ム シ

蟹江 昇

タマムシの仲間は意外に多く、日本には200種あまりが棲息しています。一部の種は体長40mmほどありますが、多くの種は10mm以下と小型です。

タマムシといえば美しい昆虫の代表として誰もが緑、赤、紫の金属色に輝くヤマトタマムシを思い浮かべます。その宝石のような色彩は古今特別な昆虫として扱われ、多くの伝承を生みました。

玉虫色とは体色が見る角度により違った色に見えることが語源のようです。タマムシは吉兆虫とも呼ばれ、和紙にくるみタンスの引き出しに入れると、その鮮やかな輝きにカツオブシムシやシミなど衣類を食害する虫が逃げ出すとか、また女性が殿方を誘惑する媚薬として効果があるとも言われます。現実的には殿方に効果があるかは定かではありませんが、衣類の害虫を誘引し被害を拡大させてしまうことだけは確かです。

工芸品としては法隆寺の玉虫厨子が有名で、昭和35年のレプリカ製作時には15,000頭ものヤマトタマムシが集められたようです。

タマムシの妖しく美しい輝きから多くのエピソードが生まれましたが、本当は天敵である鳥がきらきら光るものを恐れる性質をうまく取り入れた進化の結果といわれます。

矢作川流域には多くのタマムシが棲息しています。その中で特徴のあるタマムシについて書いてみたいと思います。

ヤマトタマムシは神社や川辺のエノキに多く見られ、7、8月の炎天下、樹上高くを旋回するのがよく見られます。昆虫採集をする子供たちには大人気ですが、なかなか手の届くところには下りてこず、憧れの虫でもあります。幼虫はエノキ、サクラ、アベマキなどの枯れ木を食べて育ち鉄砲虫とも呼ばれます。

越戸ダム下流にはエサキキンヘリタマムシというこれも非常にきれいなタマムシが生息しています。全国的にも稀な種といわれていますが、矢作川で観察したところ幼虫が河原のネコヤナギを食べ、成虫は河畔のカワラハンノキの葉を食べる生態が分かり、矢作川流域には沢山の生息地があることが判明しました。

もう一種矢作川に非常に縁の深いタマムシがあります。クロケシタマムシという名の通り体長3mm程度、小さく真っ黒な色のタマムシです。矢作川の調査で堤防上の荒れた草地で見つかりました。このタマムシも生態が分からず非常に珍しい種とされていました。その後の調査で幼虫が荒地に生えるチガヤにつくことが判明し、各地の河川敷に棲息することが分かりました。本来は洪水で荒れる河川敷に適応した種でしたが、ダムや河川整備で川が荒れなくなり、次第に生息地が狭められてきたものの、堤防という人工的な荒地に新たな生息環境を見出したものと推測されます。小さな虫ですが、なかなか生活力のあるタマムシです。

(かにえ のぼる、日本鞘翅学会 会員・  
豊田市矢作川研究所 共同研究員)

# 新たな挑戦にむけて

羽根博之



川を生かした街づくりプロジェクトが始まった。豊田市矢作川研究所を主体とした河辺自然環境班、市職員が集まった都市環境計画班などがそれぞれの観点から、生物の生息場としてのまちを都市的なまちづくりと関連させて構築していこうという壮大な計画の始まりである。

われわれ都市環境計画班のことについて書こう。



まちにはみちがある。みずのみちがあり、地下水のみちもある。風のみちがある。人のみちがある。生き物のみちがある。まちのどこかにこれらのみちの遠い過去からの痕跡が隠れているはずだ。

われわれは、そのみちを探そう。

まだくらい明け方に吹く風を、だれが一番早く感じているのだろうか。新聞配達少年か。市場に農作物を出荷する農家のおやじさんか。神社に住まうコノハズクが今年初めて姿を見せた。昨日まで見かけなかった草花が咲いている。そんな季節の変化をいち早く察知するそんな感性を持ちたいものだ。感じる心を大事にしてまちづくりを語ろうと思う。

新しいまちづくりの挑戦が今始まった。



(はね ひろゆき、豊田市河川課 係長)



今月の一匹

古川水辺公園でウナギの仕掛けにかかった  
大きなナマス。体長約70cm。  
(二〇〇二年六月二十日 洲崎燈子撮影)

# 川が育てる栄養ドリンク ヘビトンボ

白金晶子



ヘビトンボ (幼虫)

矢作川の上中流部で瀬の川底にある石をひっくり返すと、ムカデに似た赤茶色の物体を見つけて「ギョッ」とします。これはヘビトンボという最大60~70mmにも達する川虫で、日本中に分布しています。ムカデみたいに脚がたくさんあるように

見えますが、脚は胸に付いている6本で、それ以外の先端がふさ状をしたものはエラです。ヘビトンボの幼虫は2~3年水中で生活した後、初夏に上陸して川岸の土中にもぐって蛹となります。約2週間後に成虫となり、雌は川岸の植物や岩石に産卵し、2週間ほどで孵化した幼虫は水中に落下して、再び水中生活が始まります。

ヘビトンボの幼虫は別名マゴタロウムシ(孫太郎虫)とも呼ばれ、800年以上前から販売されており、食用、滋養強壮剤、さらには小児疳の薬として用いられています。その成分は栄養ドリンクに勝るとも劣らないものだそうです。孫太郎虫は宮城県南部を流れる斎川の特産品として有名で、かつては孫太郎虫の採捕・流通を取り仕切る「孫太郎虫組合」が設けられており、現在でも「孫太郎虫資料館」や「孫太郎虫供養碑」などがあります。斎川で採られた孫太郎虫は水洗いした後、茹でて5匹ずつを串に刺し乾燥させて、2串ずつを

箱に詰め売られています。最盛期には年間5万串(25万匹)の出荷があり、北は北海道、南は九州まで出荷されたようです。この孫太郎虫の需要も昭和10年頃をピークに衰え始め、戦後には薬品としての販売が出来なくなり、現在では食品として若干量が販売されているにすぎないようです。

ヘビトンボは環境省と国土交通省が行っている「水生生物による水質判定」の中で“きれいな水”の指標となる生きものに入っており、また肉食性なので餌となるたくさんの水生動物がすむ川でなければ暮らしていけません。この夏こんなヘビトンボのことを考えながら、矢作川で石をひっくり返してみたいはいかがでしょうか。でも、噛まれるとかなり痛いそうですので、くれぐれも気を付けて!

(しらがね あきこ、豊田市矢作川研究所 研究員)

(成虫・幼虫の写真は稲田和久氏 撮影)

## 参考文献

丸山博紀・高井幹生 原色川虫図鑑

茂木裕樹 孫太郎虫の採捕活動について 民具マンスリー35巻3号

(財)日本自然保護協会 昆虫ウォッチング



孫太郎虫はこのような状態で販売されている。左は包装のデザイン。

# 研究所の 調査風景

6月18日(火)・21日(金)

3ヶ月ごとに実施している水生生物の広域調査を行いました。小漣で調査中、河川監視員の堀貞雄さんが通りかかれ、「アオンドロがいつばい生えているところがあるよ」と案内してくださいました。そこは、矢作第2ダム直下から時瀬の発電所までの区間でした。おもしろいことに支川の明智川が合流する上流側と下流側で生えている大型糸状緑藻の種類が違っていました。第2ダム直下から明智川合流点までは、アオミドロが河床一面に繁茂しており、時瀬発電所付近ではカワシオグサがベツト川と繁茂していました(写真参照)。



アオミドロ (矢作第2ダム下流)



カワシオグサ (時瀬)

7月5日(金)

アユの飼育実験用の施設づくりを行っています。昨年に実施した緑線歩道のせせらぎ水路ではアユが落ちて着かず、餌を全く食べなかったために、今年は場所を越戸ダムの魚道に変更して実験を行う計画です。ここだと人や車の往来もほとんどなく、矢作川の水で実験を行える利点があります。(山本)



矢作川漁協横(越戸町)の実験区間

## 豊田市矢作川研究所セミナー ～お客様編～

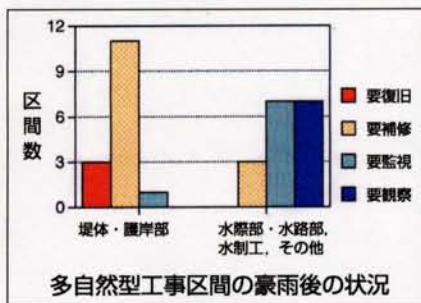
当研究所では月に2回程度のペースでセミナーを開いています。だいたい各研究員が持ち回りで研究発表や文献紹介などを行うのですが、6月は外部の方をお招きしての開催となりました。まず20日(休)には、愛知県河川課 環境・海岸グループの近藤朗氏により「東海豪雨のインパクトを受けた愛知県の多自然型川づくり

調査」と題する発表がありました。これは2000年9月の豪雨後に、県内で多自然型川づくりが行われた64河川94区間を調査し、被害状況の評価を行ったものです。図からも分かるように、被災した区間のうち堤体・護岸部では15地点中3地点のみが「要復旧」で、11地点が表土や植生の復元で簡易に復旧できる「要補修」と判断されました。水際部・水路部、水制工その他では「要復旧」は17地点中1地点もなく、河川工事で治水と環境保全が両立する可能性が示されたように思いました。翌週の28日(金)には文部科学省大学共同利用機関 総合地球環境学研究所の中西正己教授による「琵琶湖



中西先生のセミナーの様子

研究30年から見た水界の環境問題」と題した発表が行われました。中西教授は約30年間に渡って琵琶湖で水質や植物プランクトンの研究を続けられており、県民総生産や土地利用、人工沿岸率と水質や植物プランクトンの変化の関わりや、pH、DO、T-N、T-Pといった水質調査項目の長期的変動要因など、厚みのあるデータに裏付けられたお話をうかがうことができました。(洲崎)



## 編集後記

今年の春はアユがたくさん遡上したのに、これまでのところ釣果は芳しくありません。私が研究所に入った1998年とよく似た状況です。こんな年は、ときおり研究所や市の河川課に「なぜアユがつれんのだ」という苦情の電話がかかってきます。それが分かれば…というところです。ここで一句「群れアユに 聞き取り調査が できたらな」(洲)

ご意見・ご感想をお寄せください